

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

牧 野 俊 重

1

1846年の穀物法の廃止は1849年における航海法の廃棄等と相俟って、イギリスの自由貿易体制を確立させたものであった。イギリス農業はその穀物法の撤廃以降19世紀末に至る期間に全く相異なる二つの時期を経験した。第一期は自由放任政策が採られ保護のない状態に置かれたにも拘らず、1870年代前半までの略30年間に亘る最も恵まれた時代である。殊に1850年代から70年代前半にかけての時期には「高度農業」がそのピークに達し、イギリス農業は空前の繁栄と進歩を示した所謂「黄金時代」を現出したのであった。そして、この時期のイギリス農業については既に考察した¹⁾。従って、本稿はそれに続く第二期を取り扱うものであり、大不況期のイギリス農業の考察を課題としている。以下、イギリス農業が不況を経験するに至った要因と不況の様相を考察し、加えて不況に直面した農業に対する政府の政策が如何なるものであったかについて、農政の国際的比較も併せて行い乍ら、検討していくこととしたい。

2

イギリス農業の不況を考察する前に、ここで19世紀の略第四・四半期の主要諸国を中心とした国際的経済状況を概観しておきたい。

1873年の世界恐慌から1893年の恐慌を経て略1896年までの時期は、一般に「大不況 (The Great Depression)」期として理解されている。ドイツに

おける数年に亘る株式会社の（投機的）設立ラッシュに伴った株式への投資ブームは、遂に1873年6月ウィーンで金融恐慌を惹起した²⁾。また、アメリカでは当時鉄道の建設ブームであった。南北戦争後鉄道業はアメリカで最大の非農業部門における雇用者となっており、銀行その他の産業は鉄道業を優良な投資対象と看做していたが、1873年9月の鉄道投資に深く関わっていたジェイ・クック商会（Jay Cooke & Company）の倒産を機にニューヨークで金融恐慌が勃発した³⁾。この二つの恐慌は殆ど他の工業国乃至は当時工業化しつつあった国へと拡張し、世界恐慌とそれに続く不況を齎したのである。殊に価格の継続的低落は1890年代半ば乃至後半まで続き、この事実はイギリスで——1930年代のより一層大きな災難まで——「大不況」として理解されたのであった⁴⁾。現在ではこの「大不況」という語は広く世界的にこの時期を規定する用語となっている。そして、この大不況期の一般的な価格の低下傾向の中でも、穀物を中心とする農産物価格の低落は特に顕著な現象であった。換言すれば、「大不況」期は長期に亘る「農業不況」期と重層していたのである⁵⁾。

3

当時、資本主義の発祥国であったイギリスは依然として先進国であったが、企業組織が未だ個人所有か合資組織中心であったため、1873年の恐慌の影響を直接被ることはなかった。しかし、この恐慌の波はイギリスにも1875年頃から波及し始め、イギリス農業界の辛苦もこの全般的な経済不況と略時を同じくして始まった。然もこの農業不況は極めて深刻であり、イギリス農業に塗炭の苦しみを舐めさせ乍ら、殆ど好況に転化することなく略1896年まで継続したのである。イギリス農業が好況を再び取り戻すのは漸く第一次世界大戦が始まってからであった。

不況の何よりの原因は穀物と羊毛を主とする農産物全般の価格の厳しく

継続的な低落であり、イギリスにおいて価格の下落を齎した直接の要因は疑いなく輸入量の増大であった。そして、この価格下落の影響は生産量の低下と費用の増加を招来した悪天候の連続によって増幅されたのである。加えて、耕作農民はまた彼等の販売した農産物の価格下落の結果として生じた多額の生産に要する費用の不足からも損害を被ったのであった。既に結論的になるが、この三点がイギリス農業が経験した大不況の最も重要な要因であったと言えるであろう⁶⁾。

農業界の不況は1870年代の後半から1880年代の初頭に感じられるに至ったが、当初は穀物価格の長期に亘る低落は1875年から始まる一連の悪天候と不作によって隠蔽されていた。周知の如く農業はその生産過程において自然の影響を受ける度合が極めて大きな分野であり、1850年頃から1870年代前半にイギリス農業が「黄金時代」を享受し得た要因の一つに恵まれた天候があった。しかし、この大不況の時期にはそれが丁度逆の方向に現れ、作用したのである。その悲惨な状況について先ずここで見ておきたい。

悪天候とそれに伴う不作は1875年の秋から始まった。即ち、1875年の雨の多い秋に続いて、1876年－7年の冬期の異常に厳しい降雨がイギリス農業を襲い、1878年の春からまた2年半に亘って異例の寒く雨の多い時期が続いたのである。1878年3月の大量の降雪は4月に至って多くの地域で激しい洪水を齎し、1878年－9年の冬期は厳しい天候の連続で家畜にとっても極めて悲惨な状態であった。悪名高い1879年——曾て記録した最も惨めな不作年の一つをこの年の収穫高は示した——の残余に関しても、3月末の厳しい霜を伴って全ての月において温度は過去38年間の平均より低かった。雨量も亦殆どの観測記録所において3月を除いて最初の9カ月間平均を可成り上回った。地方平均の降雨量は南部と東部が最多で、西部と北部に進むに連れて減少した。カムバランド——イングランド北西部の旧州——と南ウェイルズはその地方平均より少なかったが、ベリ・セイント・エドマンズ——イングランド東部の北海に臨むサファク州の都市——

はその平均降雨量より50%多く、サセックス——イングランド東南部の旧州——のバルバラ近くではこの年に異なった別個の13の洪水を記録している。イングランドの中部地方（Midlands）の水に浸かった地域や、東部と南部はそれから更に二度目の例外的に長い厳しい冬に耐えなければならなかった。これに1880年の降雨量の多い夏が続き、イングランド東部のリンカンシア州で洪水を齎した。1881年1月、2月の豪雪は土壤に水分過多を生起せしめ、漸く7月に至って暑い乾燥した気候が救済を齎したが、1882年の夏が1879年と同様に寒く、日照りが少なく、雨多き夏であったのである⁷⁾。

雨の多い数年間の影響は、最悪の過度の降雨に苦しんだイングランドのハンティングダンシア州やケイムブリッジシア州西部、南東部のエシックス州において見られた如く、粘土質土壤の耕作農業において甚大であった。このような土壤では頻繁な休耕を必要とし、そのために耕耘と乾燥が雑草を処理するために組み合されていたが、その数年においては休耕地を過度に湿っぽいものとし、植物生育の栄養成分を濾し出し、また耕作不可能な状態にし、これ等の農場は結果として雑草で蔽われたのであった。イングランド東部のケイムブリッジシア、エシックス、ハンティングダンシア、ノーファクそしてサファクの5州では、剥き出しの休耕地に戻った面積は平均で1877年－9年の10万6000エーカーから1881年－3年の15万2000エーカーへと増加している。このような遊休の非植付地を耕すための余分の費用に、穀物栽培農地の低い収穫高による収入の著しい低下が加わったのである。生産高に関するロサムステッド試験場——ハートファードシア州同地の地主の子ローズ卿（Sir John Bennet Lawes）によって創設された——のデータと平均価格とを考慮すると、1エーカー当りの平均総収入は1879年には1876年のその辛うじて半分であった。また、1879年から1882年にかけての三収穫期に関する総収入は1エーカー当りの平均で1876年－78年の約8ポンド10シリングに比して約6ポンドであった。それは殆ど30%の減

少であり、多くの穀物生産農家から利益を奪い去るのに十分なものであった⁸⁾。以前は不作時の農民は収穫高の不足によって齎された高価格によっていくらかの補償を得るのが常であった。しかし、状況は新しい要因——穀物輸入量の著増——によって一変していたのである。

また、この時期には悪天候の影響も受けて、都合悪く一連の家畜の伝染病が流行し、畜産農家を中心に痛手を被ったのであった。ここで、それについて見ておきたい。

1877年には牛疫 (rinderpest) ——反芻動物の急性熱性のウイルス病で、激しい出血性の胃腸炎を伴う——が流行している⁹⁾。また、1878年から1882年に至る雨の多い季節の連続は、イングランド南西部のサマセット州とドーセット州北部の谷地やイングランド東部のリンカンシャー州の沼地のような低地の殆ど全ての耕作及び草地農場において羊の肝蛭症 (liver rot) ——大型の吸虫類が肝臓に寄生し、肝硬変を来して死に至らしめる——が猖獗を極め、1881年から1883年には口蹄疫 (foot-and-mouth disease) ——牛・羊・山羊・豚等の偶蹄類動物を冒すウイルス病で、口腔粘膜、蹄冠部等に水疱が生じる熱性伝染性疾患——の発生が猛威を振った¹⁰⁾。これによって、イングランドでは羊の頭数が1878年6月の1840万頭から1882年の1490万頭という低い水準まで減少し、イースト・アングリア——ノーファク、サファクの両州から成る——のような耕作地域では毎年6月実施の年次調査において羊の頭数は不況期を通じて減少し続けたのであった¹¹⁾。

肥育して販売するために飼っている羊の価格が1879年から1883年にかけて著しく上昇したことは、特に低地地方の農民にとって不幸であった。1878年－9年と1879年－80年の二度の厳しい冬は丘で飼育されている羊の大量損失を齎し、その結果ここからの供給も多くの低地地方の農民が肝蛭症の流行後に羊を補充しようとしていた時に減少したのである。斯くて、降雨量の多い季節の連続、穀物の低い生産高、そして羊の大量損失の組合せは、多くの粘土質土壌の農民に財政的打撃を与えたのであった。リッチ

モンド委員会 (Richmond Commission)¹²⁾ の南部諸州に関する副委員 (Assistant Commissioner) であったリトゥルは次の如く記している。「収穫と販売の費用を辛うじて支払った穀物類、採集者が決して足を踏み入れなかったホップ園、全作物が洪水によって洗い流された牧草地、そして寝藁即ち厩肥として使用されるために秣用の干し草が10月という月に荷車で運ばれている牧草地、数ヵ月の労働と費用とが全く投げ棄てられた休耕地、如何なる出費も惜しまなかったが、それでもその作物が価値を失った根菜類を見」てきた。「これ等の事実を私は単に一つのそして例外的な場合においてだけでなく、しばしばそしてこの地方の多くの異なった地域において見てきた。そして、全ての中で恐らく最も由々しい損失として、全ての羊の群が致命的な病気である肝蛭症によって処分されてきたことを私は多くの所で聞き知っている」¹³⁾ と。同委員会のために東部諸州を視察したドゥルースは、「連続した天候厳しい季節が土地の価値を低下させてきた悪い状況と、そしてそれによって必要となった農場労働の増加」に言及したのであった¹⁴⁾。また、プリングルは「繰り返しの利用によって耕地の改良はなされておらず、雑草等が除かれておらず、酸性度が和らげられておらず、そして土地が粉状に砕かれていない固い土壌は、雑草と困惑という絶望的な状態に至っている。……1879年の結果は、古くからの借地人に著しく打撃を与え、新しい借地人の多くを破産させ、そして自分自身の土地を耕作する地主に由々しい損失を負わせた」¹⁵⁾ と記したのであった。

この悪天候が連続した時期は常に農業者全体に損害を齎したが、殊に雑草が蔓延した休耕地を耕地状態に戻すのに、そして肝蛭症の流行後に牧草地に羊を再び放牧するのに必要であった資本や信用が様々な理由で不足していた粘土質の重い土壌の耕作農民に大きな痛手を与えたのであった。1883年に始まった好天候の季節は、穀物価格の下落との時間的一致がなかったならば、臆ては一連の最悪の状態を克服させ、或いは多くの農民の財政を立て直す機会となったであろう。しかし、1883年に経験した価格水準

は耕種農業の既存のパターンの根本的な変更を要求するものであった。平均費用の上昇或いは平均生産高の低下に苦しんだ多くの農場は、穀物からの収入が総費用を賄って不十分な利益しか得られないことを知った。しかし乍ら、既存の制度に替わって実質的に他に採るべき方策は農業構造の根本的な変更を意味したが、多くの農業者はその実現のための資金も、知識も、また当初は地主の支持もなかったのである¹⁶⁾。斯くて、如上の災害の組合せは多くの農業者を破滅させ、臆ては地主をして地代を免じるか軽減することを余儀なくせしめたのであった¹⁷⁾。

4

1860年以前においても小麦価格は年々幅広く変動したが、それは主に国内生産高の多寡によるものであった。そして不作時の穀作農民は不足によって齎された高価格によって低収穫高の幾らかの補償を得るのが常であった。しかし、この変動は1860年代、1870年代に漸次その幅を減少させた。それは新しい要因即ち諸外国からの穀物殊に小麦の輸入の増加が状況を全く一変させ、国内の総供給量の変化による変動を著しく低下させたためであった。1870年代に入って、殊に1873年以降は穀物特に小麦の輸入量がアメリカからのものを中心として著しく上昇したのであった（表1と表2を参照されたい）。1879年にはそれが非常な量に達したので大凶作であったにも拘らず価格の下落を齎し、イギリスの耕種農民はそれによって著しい損失を被ったのであった。ここでイングランドの小麦の概算による収穫高の推移を示せば表3の如くである。また、イングランドとウェイルズにおけるイギリス穀物の年平均価格の推移は表4に示される。

南北戦争（1861年－1865年）後、アメリカでは早くも1869年5月に最初の大横断鉄道が完成したが（同年にはスエズ運河も開通している）、その勢いに示される如く急速なテンプを以て鉄道は中西部のような広大な穀物

生産地域を含む洋々とした国土で、地価の低下を伴い乍ら建設された¹⁸⁾。それは輸送コストを低下させると共に、小麦生産の機械化と相俟って小麦価格を一層安価ならしめた。穀物の加工・貯蔵・取引のセンターとして発展を遂げていたシカゴからニューヨークへの穀物輸送費は1870年と1881年の間に1ブッシェル当り33セントから14セントへと低下している。また、電信の発達に加えて、鉄製の、後には鋼鉄で建造された不定期貨物用汽船の出現が海上運賃率の引下げを実現し、穀物の大西洋横断の輸送費は1ブッシェル当り1874年の20セントから1904年の僅か2セントまで低下している。斯くて、アメリカの穀物（小麦）が好条件の下でイギリスにも大量に殺到したのであった¹⁹⁾。

既に「黄金時代」にあっても、スコットランドの小麦作付面積は1854年－57年の非公式の調査と1866年の公式調査の開始との間で鋭く低下し、同時に大麦と燕麦の作付面積は増加していた。また、小麦は1860年以降ロウジアンズ——東・中・西ロウジアンの3州から成る——を除くスコットランドでは殆ど栽培されなくなっており、1866年にイングランドの北部と西部で、そしてウェイルズで小麦生産は低下していた。地域によって小麦のエイカー当りの平均総収入が、輸入増加の影響によって他の穀物生産から得られるそれに比して減少する傾向があったからであろう。唯、イースト・アングリア——ノーファク、サファクの両州から成るイングランド東部地方——の小麦面積は1876年まで増加を見せたのであった。また、その輪作に二度の小麦連作を導入していた幾つかの州では、より強靱な茎の小麦が肥沃した土壌から一層満足のいく収穫を上げたために、また一部は大麦が収穫前に倒れて損害を招き易かったためにそれが実施されたのであった²⁰⁾。

1870年代後半に大麦と燕麦の価格は低下したが、小麦の価格は露土戦争（1877年－8年）の影響による1877年のピークを伴って、1875年から1882年より後まで低下したとはいえ可成り安定的であった。従って、この6、7

年に関しては三つの穀物栽培から選択が可能であった農場では、価格という面では小麦生産が他の穀物生産より有利であった²¹⁾。また、1880年代に入っても穀物の輸入量は増加し、それと共に価格も低下したが、それでもイギリス農民は70年代後半に比べれば恵まれた季節から一時の部分的救済を享受したのであった。しかし、1891年から1894年にかけての一連の冷夏、旱魃等によって不作が生じた時、第二の危機が起ったのであった。加えて、アメリカからの小麦の輸入は相対的に安定した時期の後、再び増加を見せた。大麦、燕麦の輸入量も増加した。斯くて、1890年代半ばには穀物価格はそれまでに記録された最低値を示したのであった。小麦価格は1894年には英クォーター当り22シリング10ペンスとそれまでで最安値であり、大不況以前の水準の半分足らずに下落している。小麦程に由々しくはないが、大麦も19世紀を通じて1895年が21シリング11ペンスと（1822年の21シリング10ペンスを除けば）最低であり、燕麦も同年に14シリング6ペンスと19世紀の最安値を記録している（表4を参照されたい）²²⁾。斯くて、1879年以降の利益と資本の損失を克服しようと努めていた多くの耕作農民の被った影響は、既に以前の時期の困難が金銭的貯えを費消させていただきに尚一層厳しかったのである²³⁾。そして、関心は牧畜、酪農、及び野菜・果物・家禽のような副次的な生産品に向けられるようになった。イングランドとウェイルズの穀作面積は1871年の8,244,392エーカーから1901年には5,886,052エーカーへと縮小し、同年で永久草地の面積は11,367,298エーカーから15,399,025エーカーへと増大したのであった²⁴⁾。また、小麦、大麦、燕麦の価格は共に下落したが、小麦の下落幅が大きく、これ等三つの価格の差は1885年頃から、そして特に90年代に入って可成りの縮みを見せた。殊に1894年の小麦の平均価格は大麦のそれよりクォーター当り1シリング8ペンス低く、また少なくとも20シリング以上という通常の差（に対する認識）を超えて燕麦のそれより僅か5シリング9ペンス高いだけであった。従って、収穫高、市場価格、及び費用の地域差に考慮を払うことが栽培すべき

穀物の選択を行う際に一層重要となった。小麦を販売して飼料穀物を購入してきた多くの農民は小麦に換えて燕麦を植え、そして別の農民は大麦に切り替えた。斯くて、イングランドの牧畜中心の諸州における小麦栽培面積は1875年の1,135,000エーカーから年々減少して、1895年には僅か370,000エーカーとなっていた。また、耕作農業を中心とした諸州においても同様の傾向を辿り、その農民も1895年には小麦より大麦と燕麦の栽培により多くの面積を充てるようになっていたのである²⁵⁾。そのようなイングランド並びにスコットランドとウェイルズにおける栽培面積の推移については表5、表6を、グレート・ブリテンにおける農地全体の推移については表7を参照されたい。

表1. 連合王国の小麦の主要輸入先と輸入量の推移

(単位: 百万ハンドレッドウェイト)

	ロシア	ドイツ	カナダ	アメリカ	アルゼンチン	インド	オーストラリア
1872	17.9	3.9	1.7	8.7	—	—	0.5
1873	9.6	2.2	3.8	19.8	—	0.7	1.8
1879	8.0	3.6	4.8	36.0	—	0.9	2.2
1882	9.6	3.1	2.7	35.1	—	8.5	2.5
1889	21.3	2.5	1.2	17.0	—	9.2	1.4
1892	4.4	0.6	3.9	33.9	3.5	12.5	2.0
1899	2.5	0.5	5.3	34.7	11.4	8.2	3.7
1902	6.5	—	9.5	43.3	4.3	8.8	4.3
1909	17.8	—	16.6	15.5	20.0	14.6	10.4

出所: 注26)

(1 cwt. = 112ポンド = 約50.8kg)

表2. 連合王国の主要穀物輸入高の推移

(5年の年平均値、単位：千ハンドレッドウェイト)

	小 麦	小麦粗粉・細粉	大 麦	燕 麦	玉蜀黍
1865-9	29,820	4,193	7,493	8,399	11,819
1870-4	39,562	5,124	10,282	11,315	18,925
1875-9	52,020	7,617	11,897	12,561	33,740
1880-4	57,619	13,279	13,293	13,170	29,100
1885-9	56,110	16,034	16,405	15,153	31,054
1890-4	65,455	18,829	20,501	14,784	34,783
1895-9	69,276	20,466	21,340	16,087	51,882
1900-4	81,059	19,767	23,577	17,764	48,603
1905-9	95,349	12,693	20,137	14,994	43,474

出所：注27)

表3. イングランドの小麦の概算収穫高

(単位：1エーカー当りのブッシェル)

1873	22.9	1879	15.7
1874	29.7	1880	24.9
1875	23.2	1881	24.4
1876	25.4	1882	26.0
1877	27.0	1883	28.5
1878	30.5	1884	29.9

出所：注28)

表4. イングランドとウェールズにおけるイギリス穀物の
年平均価格の推移

(単位: 英クォーター当り)

	小 麦		大 麦		燕 麦	
1873	58 シリング 8 ペンス		40 シリング 5 ペンス		25 シリング 5 ペンス	
1874	55	9	44	11	28	10
1875	45	2	38	5	28	8
1876	46	2	35	2	26	3
1877	56	9	39	8	25	11
1878	46	5	40	2	24	4
1879	43	10	34	0	21	9
1880	44	4	33	1	23	1
1881	45	4	31	11	21	9
1882	45	1	31	2	21	10
1883	41	7	31	10	21	5
1884	35	8	30	8	20	3
1885	32	10	30	1	20	7
1886	31	0	26	7	19	0
1887	32	6	25	4	16	3
1888	31	10	27	10	16	9
1889	29	9	25	10	17	9
1890	31	11	28	8	18	7
1891	37	0	28	2	20	0
1892	30	3	26	2	19	10
1893	26	4	25	7	18	9
1894	22	10	24	6	17	1
1895	23	1	21	11	14	6
1896	26	2	22	11	14	9
1897	30	2	23	6	16	11
1898	34	0	27	2	18	5
1899	25	8	25	7	17	0
1900	26	11	24	11	17	7
1913	31	8	27	3	19	1

出所: 注29)

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

表5. 作物栽培面積の推移(イングランド)

(単位:千エーカー)

	1875	1880	1885	1890	1895
〔耕作地域〕					
小麦	1,993	1,789	1,562	1,538	970
大麦	1,340	1,347	1,280	1,199	1,269
燕麦	670	703	766	764	1,035
豆類	655	508	518	461	394
馬鈴薯	137	134	157	157	190
根緑菜	1,526	1,421	1,453	1,310	1,271
〔牧畜地域〕					
小麦	1,135	957	788	717	370
大麦	750	714	614	577	568
燕麦	752	817	882	884	1,010
豆類	233	159	159	141	102
馬鈴薯	183	191	202	191	183
根緑菜	1,003	913	926	864	823

出所: 注30)

表6. 作物栽培面積の推移(スコットランド・ウェイルズ)

(単位:千エーカー)

	1875	1880	1885	1890	1895
〔スコットランド〕					
小麦	102	74	55	62	34
大麦	265	264	237	216	217
燕麦	1,005	1,037	1,046	1,014	1,008
豆類	39	28	32	26	20
馬鈴薯	158	187	149	142	134
根緑菜	427	510	511	508	506
〔ウェイルズ〕					
小麦	112	90	74	69	44
大麦	154	143	126	120	112
燕麦	237	240	247	241	242
豆類	9	6	6	4	4
馬鈴薯	45	39	41	40	34
根緑菜	86	81	83	85	85

出所: 注31)

表7. グレート・ブリテンにおける作付面積・草地の推移

(単位:千エーカー)

	総耕地面積	小麦	大麦	燕 麦	燕・スウェーデン・燕	輪作草地	永久草地
1872	18,429	3,599	2,316	2,706	2,084	4,514	12,575
1875	18,104	3,342	2,510	2,664	2,143	4,354	13,313
1880	17,675	2,909	2,467	2,797	2,024	4,434	14,427
1885	17,202	2,478	2,257	2,940	2,015	4,654	15,343
1890	16,751	2,386	2,111	2,903	1,948	4,809	16,018
1895	15,967	1,417	2,166	3,296	1,916	4,729	16,611
1900	15,708	1,845	1,990	3,026	1,689	4,759	16,729
1905	15,086	1,797	1,714	3,051	1,589	4,477	17,201
1910	14,669	1,809	1,729	3,021	1,565	4,157	17,477
1915	14,256	2,247	1,381	3,071	1,353	3,826	17,579
1920	15,400	1,929	1,842	3,304	1,417	3,886	15,846

出所: 注32)

5

しかし乍ら、大不況期を通じて家畜の価格は穀物のそれに比して相対的に良く維持されたと言えるであろう。確かに、アーネリ卿の掲げたイギリスの農産物輸入額の推移(表8)を見れば——これは輸入額であるからその数値の変化がそのまま輸入量の推移を正確に表すものではないが——、肉類・卵・チーズ等々の輸入額は1895年には1875年の2倍以上となっており、また表9を見れば食肉の輸入量も増加し、食肉供給量に占める輸入の割合も増加している。1880年代における氷点下で冷凍状態を維持し得る新しい冷蔵装置の発達に伴って、食肉、バター、卵、果実等といった腐り易い食品のアメリカ、ニュージーランド、オーストラリアからの輸送が可能となったが、そのような冷凍肉類に加えて牛、羊、豚も大量に輸入されるに至り、それがイギリスの酪農や牧畜業に打撃を与えたことは事実であった³³⁾。しかし、後に述べる羊毛は別として、家畜の価格の低落は穀物の危

機の開始から略5年遅れて、1880年代半ばに至って始まったと言えよう。然も穀物価格の下落の由々しさに比してその低落はそれ程厳しいものではなかった。

ソーベックの指数(1867年-77年=100)によれば、作物と家畜製品の双方において1896年が最低のポイントであったが、前者が53(1895年-99年の年平均が59)であったのに対し、後者は73(77)であった。加えて、1880年から1899年までの期間については作物価格が平均で不況以前の水準の68%弱であったのに対し、家畜製品のそれは86%を維持したのであった(表10を参照されたい)³⁴⁾。また、肉類に対する需要は人口の増加より速い速度で増加を示した。表11に見られる如く、大不況期を通じてイギリスの総人口も労働者数も——農業従事労働者数は減少したが——増加している。しかし、表12の如く労働者の受け取る賃金はこの期に増加し、表13を見ればロンドンのパンの価格も上昇していない。これと共に食生活に変化が見られ、穀物以外の食肉その他の需要は増加したのであった。輸入食肉は一般に国内産より質が劣り、それ相応の価格であった。そしてその価格差は大不況期を通じて広がったのである。既に可成りの量に達していたバターとチーズの輸入は——利益のあるミルクの販売という誘因によってイギリス農民による供給が低下していた——、消費者の需要増を満たすべく一層の増加を見せた。イギリス市場において殆どの外国製品は国内産より安価な価格で販売され、食肉と同様に価格差は拡大したのであった³⁵⁾。質の問題は別として、その要因は疑いなく外国からの競合を免れて殆ど低下を示さなかったミルクの価格であった³⁶⁾。また、飼料用の玉蜀黍、品質の劣る粗穀物、油粕等の輸入量は1867年-71年と1894年-8年との間で2倍増加したが、この期間を通じて平均価格は約40%低下した。尤も家畜頭数の増加は顕著ではないが、その効果は品質の優良化や乳牛一頭当りのより多いミルクの生産量といった形で見られたのであった³⁷⁾。

アーンリ卿の表8によって輸入額を検討すれば、農業不況への転換点で

ある1875年において小麦・小麦粉の輸入額は主要農産物輸入総額の略27%を占めており、食肉・ベーコン・ハム・バター・チーズ等は23%であった。然るにその後の変化は、勿論輸入量に関しては小麦価格の下落幅が大きかったことを考慮しなければならないが、小麦・小麦粉の割合が漸次低下したのに対し、食肉・ベーコン等のそれは増加している。1880年の構成比の関係は前者の26%に対して後者は27%と逆転し、その後はその差は益々開いた。1885年、90年、95年、1900年に前者が26%、23%、21%、18%を占めたのに対し、後者の占める割合は30%、34%、39%、43%と増加したのであった。

ここで、そのような影響を受けてイギリスの家畜頭数がどのような推移を見せたかを示せば、表14、表15の通りである。イングランドでも牧畜地域と耕作地域との間で推移に変化が認められるが、全体として捉えたイングランドでは、不況期の最初の5年間に牛も羊も豚も減少するが、その後豚は増加傾向に転じ、牛は増加の後停滞し、羊は減少している様子が見て取れる。またウェイルズとスコットランドに関しては、牛の頭数はウェイルズにおいては1875年から1885年までは増加しているがそれ以後は停滞傾向にあり、スコットランドではイングランドの趨勢と同様に1880年に減少し、85年には増加しているが、その後は略横這いである。羊については双方に関して若干の増減はあったが大体横這い状態であり、豚の頭数は1880年に減少した後イングランドのように一貫した増加傾向が見られず、どちらにおいても略羊の頭数と同断の推移であった。

次に、羊について若干述べておきたい。それは羊肉と羊毛を提供するが、羊毛価格は1865年から下落し、1870年－71年の普仏戦争の影響によって71年－72年に回復したが、それから中断なく低落して最高価格期の半値以下——1865年－74年の平均の略60%——で落ち着いた。その趨勢は表16、表17からも理解されるであろう。工業製品用としての羊毛に対する需要は事業期待（business expectation）という全般的状況によって増減し、その

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

価格は常に幅広い変動に委ねられていたが、大不況期の20年に亘る全体的な下落は主として新しく居住した大陸の貿易参入による羊毛貿易量の著しい増加——それは一層の低価格でのみ吸収されるものであったが——によって生じたものであった。輸入量の著増の様相は表18の通りである。そして、羊毛価格の下落によってその生産計画が程度の差はあっても影響を被らなかったイギリス農民は殆どいなかったのである。これに加えて、穀物価格の下落はより一層複雑な影響を及ぼした。穀物価格の下落は主としてその穀物生産を支えるために家畜を飼育していた耕作農業に大きな損失を齎したが、反面それは牧草、干し草、飼料作物の貯えを補うために購入するか自ら生産した穀物を使用する牧畜農業には利益を齎したからであった³⁸⁾。

表8. 農産物輸入額の推移

(単位:千ポンド)

	牛肉・羊肉・豚肉・ ベーコン・ハム・卵・ バター・チーズ等々	牛・羊・豚	果実・堅果・ 野菜類	小麦・小麦粉	燕麦・玉蜀黍・ 大麦・粗粉・ホップ・ 米・砂糖等々	合計
1866-70 (平均)	15,044	4,528	2,470	22,629	32,399	77,069
1871-75 (平均)	23,333	5,614	4,352	30,953	44,322	108,574
1875	28,039	7,326	4,619	32,381	47,653	120,019
1880	39,838	10,239	8,299	39,328	52,134	149,837
1885	38,110	8,735	6,009	33,736	42,162	128,753
1890	48,957	11,216	7,515	32,658	43,944	144,290
1895	56,873	8,966	8,898	30,210	41,409	146,357
1900	78,002	9,622	12,299	33,448	49,944	183,315

出所: 注39)

表9. 連合王国における食肉の生産高と輸入高の推移

(単位:百万ハンドレッドウェイト)

	1872	1882	1892	1902	1912
国内生産	26.6	25.6	28.2	29.1	29.7
輸 入	4.2	9.0	13.5	20.3	21.8
合 計	30.8	34.6	41.7	49.4	51.5
輸入の割合(%)	13.6	26.0	32.3	41.1	42.3

出所: 注40)

表10. イギリス市場における食糧の価格指数

(1867年-77年=100)

	1880-84	1885-89	1890-94	1895-99	1900-04	1905-09
作 物	82	66	64	59	62	67
小 麦	78	58	54	51	50	58
大 麦	82	69	68	62	62	65
燕 麦	83	70	73	63	69	70
玉蜀黍	84	67	67	52	68	76
家畜製品	101	84	82	77	85	88
牛 肉	99	81	80	79	85	88
羊 肉	109	92	87	87	91	111
豚 肉	99	83	86	77	86	89
ベーコン	100	87	87	74	82	88
バター	98	83	83	77	82	88
全 食 糧	83	70	69	63	71	75

出所: 注41) 尚、牛肉と羊肉は上級品。中級品の価格は一層大きな価格下落があった(不況最悪時には10-15%程度)。また、全食糧は砂糖、コーヒー、茶を含む。

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

表11. グレート・ブリテンにおける総人口と労働力の推移

(単位:千人)

	イングランド・ウェールズ	スコットランド	総人口	全産業	農業	全産業に占める農業労働力の割合	総人口に占める農業労働力の割合
1861	20,066	3,062	23,128	10,523	1,942	18%	8.3%
1871	22,712	3,360	26,072	11,752	1,769	15	6.7
1881	25,974	3,736	29,710	12,731	1,633	13	5.4
1891	29,003	4,026	33,029	14,499	1,502	10	4.5
1901	32,528	4,472	37,000	16,280	1,406	9	3.8
1911	36,070	4,761	40,831	18,286	1,496	8	3.6

出所: 注42) 尚、数字は男女の合計であり、労働力は10歳未満の働く児童を含む。また、農業は園芸・林業を含み、水産業は含まない。

表12. 連合王国における労働者の賃金指数の推移

(1914年=100)

	貨幣賃金	実質賃金	生計費
1880	72	69	105
1885	73	81	91
1890	83	93	89
1895	83	100	83
1900	94	103	91
1905	89	97	92
1910	94	98	96

出所: 注43)

表13. ロンドンにおけるパンの平均価格

(各期の年平均 4重量ポンド当り)

1871-75	8.17 ペンス
1876-80	7.38
1881-85	6.89
1886-90	5.92
1891-95	5.75
1896-00	5.39
1901-05	5.37
1906-10	5.74

出所: 注44)

表14. イングランドにおける家畜頭数の推移

(単位:千頭)

	牧 畜 地 域					耕 作 地 域				
	1875	1880	1885	1890	1895	1875	1880	1885	1890	1895
馬	516	549	548	562	598	516	543	534	537	586
牛	2,751	2,707	3,076	3,015	2,833	1,468	1,451	1,637	1,602	1,640
羊	10,000	8,785	8,961	9,351	8,506	9,114	8,044	7,849	7,490	7,052
豚	903	807	1,004	1,221	1,237	973	891	1,033	1,135	1,234

出所: 注45)

表15. ウェイルズとスコットランドにおける家畜頭数の推移

(単位:千頭)

	ウェイルズ					スコットランド				
	1875	1880	1885	1890	1895	1875	1880	1885	1890	1895
馬	125	135	140	144	153	183	194	189	190	207
牛	651	655	709	705	704	1,143	1,099	1,176	1,186	1,180
羊	2,952	2,718	2,768	3,070	3,001	7,101	7,072	6,957	7,361	7,234
豚	203	182	216	258	206	151	121	151	160	153

出所: 注46)

表16. グレート・ブリテンにおける未加工羊毛価格の推移

(単位: 1重量ポンド当り)

	リンカン種の羊毛 ¹⁾	輸入品の平均価格
1865	25 $\frac{3}{4}$ ペンス	16.9 ペンス
1870	16 $\frac{3}{4}$	14.4
1875	19 $\frac{3}{4}$	15.4
1880	15 $\frac{1}{8}$	13.7
1885	9 $\frac{7}{8}$	10.0
1890	11	10.3
1895	12	8.1
1900	7 $\frac{7}{8}$	9.5
1905	12 $\frac{3}{8}$	9.3

出所: 注47) 1) リンカン種の若羊から刈り取った羊毛が半分入ったものの価格。

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

表17. 羊毛の卸売価格の推移

(単位：14重量ポンド当り)

	1873	1880	1888	1896	1913
羊毛 ¹⁾	28 シリング 7 ペンス	17 シリング 8 ペンス	12 シリング 1 ペニ	13 シリング 5 ペンス	14 シリング 5 ペンス

出所：注48) 1) 英国産長毛種の羊毛。

表18. 連合王国の未加工羊毛輸入量の推移

(単位：百万重量ポンド)

	総 量	オーストラレイジャから	
1865	212.2	109.7	
1870	263.3	175.1	
1875	365.1	238.6	
1880	463.5	300.6	
1885	505.7	356.1	
		オーストラリアから	ニュージーランドから
1890	633.0	323.1	95.6
1895	775.4	417.2	124.2
1900	559.0	250.1	136.2
1905	620.4	253.7	139.3

出所：注49)

6

繁栄が持続した黄金時代の後に急速に襲った不況であっただけに、イギリスの農業界に与えた打撃は大きかった。高度農業時代に明るい将来を夢見て高い土地を購入し、また地代を競り上げた農業者は今や負債に苦しまなければならなかった。建物や設備の維持や管理は十分に行われ得ず、時に荒廃するままに放置された。不況の痛手を最も厳しく被ったのは穀作地域、特に重粘土質土壌のイングランド東部や南部の穀物栽培農業者であり、小麦が彼等の何より重要な現金作物であった。彼等は雨で湿った季節にその土地に対応するための問題を抱え、また彼等の労働コストは軽質土壌の

農業者より高かったので、特に生産物の価格の低落に脆かったのである。然るにそれは最も早く、最も由々しく彼等を襲ったのであった。

しかし、彼等は全てのイギリス農業者のほんの一部となっており、また不況が到来する前でさえ穀物は既にイギリス農業の総生産額の僅かを占めるに過ぎなくなっていたのである。1870-76年に小麦、大麦、燕麦の生産額は連合王国の農業生産額の僅か18.1%を占めるに過ぎず、小麦だけでは8.4%であった。1911年-13年には全穀物の占める割合は10.3%まで低下し、小麦は4.1%であった。それに対して、家畜や家禽や食肉、ミルク、羊毛、卵等の家畜製品は1870年-76年の生産額の62%を占めており、1911年-13年にはそれ等は74%に達していたのである（表19を参照されたい）。就中その中で重要なものは1870年-76年に41.8%、1911年-13年にも41.9%を占めた食肉と、同期で17.8%から23.8%に増加したミルクであった。また、そのような過程で表7にも見られる如く、耕地面積の減少と永久草地の増加が見られたのである。一時的な輪作草地の面積はイングランドとウェイルズでの低下がスコットランドにおける増加で相殺され、殆ど変わらなかった。このようにイギリス農業は可能な限り家畜部門に切り換えることによって、下落した穀物価格に対応したのであった⁵⁰⁾。しかし、既述の如く穀物価格の下落に比べてそれ程厳しいものではなかったにせよ、遅れて1880年代半ばから1890年代にかけて家畜とその製品の価格も亦低下し、イギリス農業の不況は耕作地域（州）の深刻な状況に加え、酪農や牧畜業を中心とする地域（州）へと拡大したのであった。

ところで、この時期を比較的能く凌ぎ得たのは如何なる農業者であったか。第一は豊富な資本を動かし得た大農であり、彼等は土地、設備、家畜に投資することにより耕作農業から草地農業へ転換し、穀物不況の影響を避けることに成功したのであった。第二の農業者は主として家族の労働力によって経営を行っていた小農であって、彼等は賃金の支払いを節約することによって不況を切り抜けることが出来た。これに対して、転換のため

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

の十分な資本を擁せず、雇用労働力にも頼らなければならなかった中農は、最も大きな打撃に晒された。彼等の中には破産し、或いは農場を放棄する者も生じた。しかし、農業者の減少はこの不況期にそれ程顕著には見られなかったのである⁵¹⁾。これに反し、他部門における雇用の増大が続いたために農業労働者の都市産業等への移動は著しく、表11によれば1881年と1901年との間に略23万人が離農し、全産業に占める農業の労働力の割合も1871年の15%から1901年の9%弱へと著しく低下したのであった。

しかし、1897年以降殆どの農産物乃至農業製品の価格は低落を止め、漸次回復に向かった。それと共にイギリス農業は不況から脱したのである⁵²⁾。これまでの考察で明らかにしようと務め、また種々な箇所を示してきたこの問題に対する結論は、以上のように要約されるであろう。 (未完)

表19. 連合王国の農業生産額と農業所得の推移

(単位:百万ポンド)

	作物	家畜	家畜製品	総収入	農業所得
1870 - 76	94.99 (38)	100.17 (41)	52.02 (21)	247.18	201
1877 - 85	75.99 (35)	95.20 (43)	48.01 (22)	219.20	174
1886 - 93	56.75 (30)	85.04 (45)	46.00 (24)	187.80	148
1894-1903	49.77 (27)	86.11 (47)	46.90 (26)	182.78	135
1904 - 10	50.68 (25)	91.71 (46)	58.36 (29)	200.75	149
1911 - 13	56.23 (25)	98.84 (44)	67.05 (30)	222.12	162
1920 - 22	126.97 (26)	190.32 (39)	172.68 (35)	489.97	377

出所: 注53) 尚、括弧内の数字は総収入に占める割合(%)。また、農業所得は農家消費食糧の小売価値額を含む。

注

- 1) 拙稿「イギリスにおける農業と農政の推移について——黄金時代を中心として——」(『敬愛大学研究論集』第56号所収 1999年)を参照されたい。
- 2) ドイツの工業化の初期のテンポは緩慢であり、1815年から1850年にかけての工業化の歩みは緩やかな部分現象に留まった。しかし、ドイツ経済は——1834年の関税同盟の発足や鉄道の建設開始を契機として——1850年を境に持続的な成長過程に入った。既に経済的統一は達成されており、一層の投資、貿易、そして工業生産の新しい上昇過程は1869年に始まった。そして、普仏戦争(1870年7月—71年2月)、フランスにおける第二帝政の崩壊(1870年9月)、ドイツにおける新しい第二帝国(ドイツ帝国)の成立(1871年1月)を経験するのである。この戦争の成功裡の終焉、50億フランの賠償金、帝国の成立宣言はそのようなドイツ経済の勢いとブームに快感(euphoria)を加えた。1871年だけで207の新しい株式会社が——1869年の北ドイツ連邦(1867年—1871年)の新しい自由な会社設立法の支えもあって——生まれている。1872年には479社が新設された。この過程でドイツの投資家は銀行の勧奨もあって、ドイツの会社の外国所有株の買戻しを始めた。更には国外への投資も開始した。この過度の活動は厳しい不況を告げた1873年6月のウィーンでの金融恐慌によって突然停止するに至った。にも拘らず、不況がその経過を辿った後ドイツ経済の成長は以前より一層強力に回復した。1883年乃至1913年の国内の純生産は年率3%を超過して増大し、一人当りの基準でも増加は殆ど年2%であった。Cf. Rondo Cameron and Larry Neal, *A Concise Economic History of the World: From Paleolithic Times to the Present*, 4th edition (New York: Oxford University Press, 2003), p. 241.
- 3) Joel Mokyr (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Economic History*, Vol. 2 (New York: Oxford University Press, 2003), p. 311.
- 4) Rondo Cameron and Larry Neal, *op. cit.*, p. 296.
- 5) 尚、この大不況という語が長期に亘る歴史的過程を一括する語として適切であるか否かについては議論のあるところである。また、同時代人の間でも経過しつつある経済状況を不況と看做すかについては意見の相異が見られた。確かに、歴史統計的に国民所得、工業生産、貿易の面では全体として前進があったことが示されており、経済成長もアメリカ、ドイツは勿論、イギリスでも前後の時期と比較して鈍化しているがそれでも全体としては持続的であった。また、実質賃金や生活水準の面でも後退は見られなかった。但し、この時期の最も特徴的な現象として価格の一般的低落があったことは事実である。これに利子率の低下、利潤率の低下が加わった。ここに、大不況が存在すると考えた人々の最大の根拠があったのであろう。利潤率の低下は経営者に不安・不満を与え、投資行動を弱める方向に作用した。また、実質賃金は食糧価格の下落によって全体として上昇傾向にあったが、これは賃金を支払

われた労働者の生活にのみ妥当し、この時期の失業率の高さを考慮すれば楽観的なものではなかった。大不況を、その原因を含めて如何に把握するかについては未だ十分に解明されたとは言えないが、唯この時期が19世紀第三・四半期の経済の大展開期の後を承けて、資本主義の大きな転換と再編の時期であったことだけは事実であろう。藤瀬浩司著『資本主義世界の成立』（ミネルヴァ書房 1981年）160-162頁。

- 6) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *History of British Agriculture, 1846-1914* (London: Longmans, Green and Co. Ltd., 1964), pp. 240-241.
- 7) Ibid., pp. 242-243.
- 8) Ibid., pp. 243-244.
- 9) Michael Tracy, *Government and Agriculture in Western Europe 1880-1988*, 3rd edition (New York: Harvester Wheatsheaf, 1989), p. 41.
- 10) 口蹄疫は現在もしばしば発生する。イギリス政府は2007年8月3日、同国南部で口蹄疫に感染した牛が発見されたと発表し、その拡大を防ぐため牛、豚等の移動を直ちに禁止すると共に、感染牛が発見された農場では全ての牛が殺処分され、感染経路の調査に踏み切り、ブラウン首相は対応を協議するため夏休みを切り上げている。同国では2001年にも口蹄疫が猛威を振り、牧畜業や観光業に大きな打撃を与え、この時は数百万頭の牛その他が殺処分されたが、欧州の広い範囲に拡大し、当時のブレア政権は対応の遅れを批判された。日本の農林水産省は4日、イギリスからの豚肉輸入（数量は5トン程度）を停止し、イギリス政府からの正式連絡によって豚肉輸入の禁止措置に切り替える方針であり、また同国の牛肉や羊肉は牛海綿状脳症（BSE）発生以来、輸入禁止が続けられている。朝日新聞（2007年8月4日〈土〉付 夕刊）によれば、大概以上の如くである。今においてもこれ程に由々しいのである。
- 11) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, p. 244.
- 12) 1879年に政府はリッチモンド公爵を委員長とする「農業界の不況状態に関する王立委員会（Royal Commission on the Depressed Condition of the Agricultural Interest）」を任命した。そこから同委員会は単にリッチモンド委員会として知られている。Jonathan Brown, *Agriculture in England: A survey of farming, 1870-1947* (Manchester: Manchester University Press, 1987), p. 1.
- 13) W. C. Little, *Report on Southern Counties*, R. C. 1881, p. 394, cited in Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, pp. 244-245.
- 14) S. B. L. Druce, *Report on the Eastern Counties*, R. C. 1881, p. 363, cited in Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, p. 245.
- 15) R. Hunter Pringle, *Report on ... Essex*, R. C. 1894, p. 40, cited in Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, p. 245.

- 16) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, p. 245.
 17) Michael Tracy, *op. cit.*, p. 41.
 18) アメリカにおける鉄道の発達の様相を営業マイル数の推移で示せば下表の如くである (単位はマイル)。

1850年	9,021	1890年	166,703
1860年	30,626	1900年	192,556
1870年	52,922	1910年	240,831
1880年	93,262	1920年	259,941

U. S. Department of Commerce, Bureau of the census, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970*, bicentennial edition (Washington, D. C.: U. S. Government Printing Office, 1975), Part 2, pp. 728, 731.

尚、1900年以降の数字は主要幹線鉄道のための営業マイル数である。また、営業マイル数は1867年と1873年の間で31,218マイル、そして1880年から1890年への10年間には73,441マイルもの増加が見られた。因に、1914年にはアメリカは全ヨーロッパよりも多くのマイル数を誇っており、全世界のマイル数の3分の1を上回っていた。時にアメリカが「鉄道の子」と言われる所以である。

- 19) Shepard B. Clough, *European Economic History: The Economic Development of Western Civilization*, 2nd edition (New York: McGraw-Hill Book Company, 1968), p. 331. 加えて、広大な草原地域での牛の放牧、1880年代に可能となった冷凍・冷蔵の設備を備えた船舶や貨車で肉類の輸送は嘲笑的な程の低価格での欧州への輸出を可能にした。斯くて、アメリカの農産物が大量に欧州市場に殺到し、大きな脅威を与えたことは事実であるが、この時期については次の点にも併せて考慮を払う必要があるであろう。ドイツと広大なロシアの穀倉地帯にも略同じ時期に鉄道が建設されており、ハムブルク或いはオデッサからの水路による相似た輸送費の引下げも達成され、東欧での安価な労働力に依存した農産物が西欧に著しい低価格で齎されたこと、また1869年に開通したスエズ運河は1874年までにはインドやオーストラリアからロンドンへの運賃を引き下げ乍ら広く利用されるに至っており、特にオーストラリアが肉類の輸出に加えて、ドイツ、フランス、スペインを犠牲にして価格を50%も引き下げ乍らその羊毛のイギリスへの輸出を大量に増加させたこと、中国や日本が良質の蚕、安価な労働力と輸送コストの故に欧州の絹の生産者より著しく低価格で絹を輸出したこと等がそれである。Cf. Shepard B. Clough, *op. cit.*, pp. 331-332; Shepard Bancroft Clough and Charles Woolsey Cole, *Economic History of Europe*, 3rd edition (Boston: D. C. Heath and Company, 1967), pp. 564-565.
- 20) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, pp. 241-242.

- 21) Ibid., p. 242.
- 22) Cf. B. R. Mitchell, *British Historical Statistics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), pp. 756-757.
- 23) Michael Tracy, *op. cit.*, p. 41; Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, p. 258.
- 24) Lord Ernle, *English Farming Past and Present*, 3rd edition (London: Longmans, Green and Co., 1922), p. 378.
- 25) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, pp. 251, 258, 267. 尚、オーウィンとウェザムの本書の統計資料に基づいたグレート・ブリテン（イギリス本島）の耕種農業の一層詳細な分析については、小林茂著『イギリスの農業と農政』（成文堂 昭和48年）85-95頁を参照されたい。
- 26) B. R. Mitchell, *op. cit.*, pp. 230-231.
- 27) Ibid., pp. 225-226より計算。
- 28) Ibid., p. 195.
- 29) Ibid., p. 757; Lord Ernle, *op. cit.*, p. 441.
- 30) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, pp. 251, 267.
- 31) Ibid., pp. 252, 268.
- 32) B. R. Mitchell, *op. cit.*, pp. 186-187.
- 33) 1880年に汽船ダニーディン号（Dunedin）がニュージーランドからロンドン港に到着したが、この汽船は冷凍バターと冷凍肉を初めてイギリスに運んだ船であった。この試験的運搬に成功してから後は、ニュージーランドやアルゼンチンやオーストラリアから定期的に冷凍のバターや肉が輸入されるようになり、それは国内の酪農や家畜の生産に可成り大きな打撃を与えたのであった。C. P. Hill, *British Economic and Social History, 1700-1914* (London: Edward Arnold <Publishers> Ltd., 1957), p. 165; 小林茂著 前掲書 82頁。
- 34) Michael Tracy, *op. cit.*, p. 42.
- 35) 公式記録が無く家畜製品の価格を得ることは容易でないが、ロンドンのミスフィールド市場での最良のイングランド産牛肉の価格は1867年－71年と1894年－8年の間で僅か11%低下しただけであった。輸入肉は一般に国内産より質が劣ったが、輸入された生鮮牛肉のそれは23%低下している。輸入羊肉の場合は国内産と競合する度合は一層少なかった。一級品質の軽量羊肉と子羊肉が8%上昇したのに比して、輸入羊肉の平均価格は約30%下落したのであった。また、ソーベックの記録によれば最良のオランダ産フリースラント・バターの価格は1867年－71年と1894年－8年の間で22%低下している。これに対して、ランカシア州の農場産バターは約13%低下しただけであった。輸入チーズの価格は20%以上低下したが、イングランドのランカシア州産とチェシア州産の最良品のそれは略10%低下しただけであった。T. W. Fletcher, "The Great Depression of English Agriculture 1873-1896", *The Economic*

History Review, Vol. XIII, No.3 (April 1961), pp.419-420.

これに対して、既述の如く、1860年代のイギリス小麦の英クォーター当りの平均価格は51シリング1ペニであったが、1879年には43シリング10ペンスとなり、1880年代を通じて下落し続け、1894年には22シリング10ペンスまで低下したのであった。大麦と燕麦の価格も亦その程度は小麦程に由々しくはなかったが著しく低下したのであった（表4参照）。

36) T. W. Fletcher, *op. cit.*, pp.419-420.

37) *Ibid.*, p.420.

38) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, p.241. 尚、羊肉価格は1865年から68年にかけての短い低落の後、1883年まで上昇し続けた。その後全般的な価格下落の中で羊肉価格も低下したが、表10にも見られる如く、羊肉は牛肉、豚肉に比して相対的に高価格を維持した。肥育羊の価格は高地地方の農場からの子羊の供給に影響を及ぼした燕の収穫高や冬期の激烈さの状況によって変動したが、一般的にはそれは羊肉価格の主要趨勢に従ったのであった。また、当時の記録は羊肉 (mutton) について記述しているが、子羊肉 (lamb) は軽量の羊に重量ポンド当りで高い価格を支払い得た余裕のある市場でのみ出荷された贅沢品であった。普通の市場では15ヵ月以下は殆どいない羊からの肉が供給されていたのである。と同時に、丘陵や山間の去勢した雄羊は最終処理のために低地の農場に来る前に既に3、4歳となっており、都市の市場は風味と赤身に混じった脂肪の申し分ない配合の双方を持っているためその肉を好んだのであった。Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, pp.142-143.

39) Lord Ernle, *op. cit.*, pp.460-461. (Appendix VII).

40) Richard Perren, *Agriculture in depression, 1870-1940* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), p.8.

41) Sauerbeck's Index in *Journal of the Royal Statistical Society*, various dates, cited in Michael Tracy, *op. cit.*, p.43.

42) B. R. Mitchell, *op. cit.*, pp.9,104. (一部計算)。

43) *Ibid.*, pp.150-151.

44) *Ibid.*, p.770より計算。

45) Christabel S. Orwin and Edith H. Whetham, *op. cit.*, pp.251, 267.

46) *Ibid.*, pp.252, 268. 尚、本書のこの資料に基づいた家畜飼育頭数の一層の分析については、小林茂著 前掲書 95-103頁を参照されたい。

47) B. R. Mitchell, *op. cit.*, p.767.

48) Richard Perren, *op. cit.*, p.9.

49) B. R. Mitchell, *op. cit.*, pp.340-341.

50) Richard Perren, *op. cit.*, pp.10-11.

51) 三沢嶽郎著『イギリスの農業経済』（農林水産業生産性向上会議 1958年）

大不況期におけるイギリスの農業と農政について (1)

51-52頁。

52) Michael Tracy, *op. cit.*, p.42.

53) B. R. Mitchell, *op. cit.*, p.215. (一部計算)。